

翻刻 当世医者風流解初編

吉丸雄哉

凡例

漢字は現在通行の字体に改めた。常用漢字表にあるものは基本それを用いたが、灯と燈など区別のため旧字体を用いたものもある。特殊な字のうちろは残した。異体字のうち、只、𧈧、𧈧は残した。反復記号は、漢字の場合はくであつても々に置き換えた。原文の「」は句点「。」にし、読点を適宜補った。発話のへは「」にして最後を閉じた。

書誌情報

当世医者風流解 初編 中本三巻三冊 津市立図書館井田文庫蔵（井田 90 537）
表紙 臙脂色無地原表紙 縦十八糎横十二糎
本文 四周短辺 縦十五・一糎横十・五糎
構成 上巻 二十九丁半（序二丁、目録二丁半、挿絵半丁、本文二十五丁半）

中巻 二十九丁（老人六歌仙一丁、若人六歌仙一丁、本文二十七丁）

下巻 二十七丁半（本文二十七丁、奥付半丁）

挿絵
上巻 六カ所（目録裏、二ウ三オ、七ウ八オ、十ウ十一オ、十五ウ十六オ、二十ウ）

中巻 七カ所（老人六歌仙一丁、若人六歌仙一丁、三ウ四オ、十一ウ十二オ、十九ウ二十オ）

下巻 四カ所（四ウ五オ、九ウ十オ、十五ウ十六オ、二十二ウ二十三オ）

題簽 原題簽双辺左肩 「當世醫者風流解 上（下）」

目録題 「當世醫者風流解」

見返題 「大新板 當世醫者風流解 全三冊」

内題 當世医者風流解

板心 ○ 喉側に丁付あるが通常は見えない。

作者 横谷南海

序文 横谷南海

画者 未詳

刊記 「文政四年巳正月 / 京都書肆 河南喜兵衛 美濃屋半

兵衛 / 大阪書肆 河内屋茂兵衛

諸本 国立国会図書館蔵本が縹色表紙、無刊記、柱に巻数が入っている。国会図書館蔵本は初編・二編とも「万弥」印があり、蓬左文庫蔵本二編にも「万弥」の印があるが、ともに後印本と思われる。

付記 次号に『当世医者風流解』二編の翻刻を予定しており、内容に関してはそこで解説するつもりである。本翻刻は科学研究費補助金基盤研究C「近世文芸と医学に関する総合的研究」(研究課題番号15K02247)の成果によるものである。

翻 刻

大新板 当世医者風流解 全三冊(見返し)
序

十返舎の膝栗毛千里にはせて今に留らず日々盛也。其尻馬に
乗らんとすれと短才しぼし鞍にたまらず落馬せん。其落た所て
火打石と思ひつるたる医者ぶりが当世の穴をさぐるにものみな
ふり有て所謂古今万葉のいにしへぶり。かんく踊の長崎ぶり
江戸子紛のきいた風流。都の手ぶり。天さがる鄙ぶり。廓ぶ
り。丹後鯛。木ふり(序オ)枝ふり頬かふり有情無情のもの皆
しかり今この書やよし当代の人情に通し野夫とみへしもたちま

ちに三枚肩のはしりがき。若党一足先へ往かう樺史の門口頼み
ませう太田了竹御見舞と云爾。

于時文政三のとし冬口から出方台において書畢(序ウ)

世当 医者風流解惣目錄

上の巻

氣転頓作先生へ厚金敷安入門の事
療治の引ことに小児のことを言聞す事
金銀かしかり古人相違の事
手代衆中情合の事
女子衆出かはり目見への事
娘の子に教訓の事(目錄1オ)
当世女の情并女夫喧嘩の事
当世こと葉つかひの事
浄留璃文句の事
娘の子嫁入口の事

中之巻

老若容儀六歌仙の事
丁稚下女使の事
手代使者の事(目錄1ウ)
乗物にて見舞やうすの事
病人脈の見やうの事
腕にて容脉を語る事
諸々の難病治療の事

肝積持又氣鬱の症を治す事

婦人の療治の事

嫩者金持の隠居療治の事

病家に軍書の引ことを言聞す事 (目録2オ)

長く葉を吞す秘密の事

悋氣深き姓分治す事

藥不利を言拔やうの事

病家先にて長咄しの事

病家先より断いはさぬ事

大医戴医問答の事

療治しくじりいひぬけの事

容膝ことばづかひの事 (目録2ウ)

下の巻

病症によつて油の製法伝授の事 数ヶ条

女房同士小兒あいさつする事

同真実にて挨拶する事

厚金敷安信のやおはん療治の事

加賀の千代敷安の夢中に踊す事

婦人秘密妙葉の事 (目録3オ)

当世医者風流解上

○夫医道の奥義は古人医は意なりと云。意は心也。心の術なくんば数千の医書を読たりとも梓に謬すごとく。用に立ぬもの也。又医は仁術とも言へり、既に聖人も宣く、親在時は医の道

を知らずんば有べからずとあるも、孝行を尽くさんとする金言

なり、又天下国家を治むるを医するといふ国の乱れ家の倒れん

とするを癒すといへば、医は第一の大立もの也 (1オ) 爰に

去ル田舎の片辺に厚金敷連といふ医者の一子に厚金敷安といふ

ものあり。傳く思ふにはかゝる辺鄙に逼々と一生をおくり

てがら。手柄した所が麦一斗、さればとて又其手柄もなしがたし。宜な

るかな国学十年の修行より京学一年の修行にはしかずと聞くれ

ば。いざや都に登りよき師をもとめ典藥大医にならばやと思

ひ、行李をして遥々と都にのぼり知るべの方に落着て先諸名医

を聞合するに (1ウ) 古方あり後世のあり。各々門をひらき表

を飾て口を叩く中にも傷寒論をひらいて唐土の張仲景にも及び

し名医なれば、急ぎ門に入て日々講席にいで聴聞すといへど

も。とんと解せず。有時々余の医生に漸く唆かされて祇園清水

に詣て、都の繁花なるに膽を消し朝日野か六分道にて少しの酒

頭上に登り。慢々眼にて其辺りを見渡せば東行西往の美人を見

て現をぬかしてながめ入、偕はふしぎ也 (2オ)

祇園からぬけ道ゆけばさまゝに心まよはす花の名所

四穂園 (2ウ・3オ)

天人のあまくだりて爰に徘徊するかと思ひ。中々医学所ても医

者所てもなく。青表紙を打捨、赤裾に眼をさらし西石から内町

へこそゝと這入寄宿料小遣等までも此赤いもの、穴にのこら

ず押込度々国元へ入用金の頼状遣せども、度重れば取敢ず、心

をいさめる折柄右の次第を傍輩の医生に語りければ。初生のい

はく。此法去藥屋の親仁か物語に今時見識はつたる医者ほとんど流行らす。孟子の日智恵ありといへども勢に乘に如ずと(3)ウ いへたがごとし。今京地の流行医者皆々当世風の一見識を立られし也。先氣転頓作先生を始として權勢弁口。高慢不斎。太鼓弁慶。茶釜順廻、欲面一芳。茶羅月文盲。沼田蓴齋。今京地に大家の売家は皆医者やの居宅となりたも、びやうくたる粧ひにぞ朝から門前に群集して市をなす。屋からは三枚肩にて飛がごとくかたいからし、誠に日本国をおれしだいといふやうな顔付にて取わけ氣(4才) 転頓作先生は実に多才絶倫にして病人一度此人を頼めば、譬へなんぼう悪ふなりても。しんでもだんないく大じない。此御医者さんより外の御医者はおしやいやくくと一筋に思ひつめさす程の大名の名人医者と聞より早く氣転頓作先生方へと馳至る。何が家の間口は拾間計に向ふの見付には。たき土にて築上たる水溜に大なる紋所苗氏などを顯し高貴方の菊の御紋付たる灯燈を屋のやうに建、乗物を釣ならべ、玄関長(4ウ) 屋侍部屋いかなる難病難治の者もなをらさるとは見へさりけり。かくて厚金敷安は此体を見てぎよつとしながら案内を乞ふて、先己が姓名を通し。兼て先生の御高名を承り及び医道の極秘伝を教へ給はんことを願ふ、取次の初生を以て通しければ。此方へ御通りあれとの案内に連て座敷に通る。氣転頓作に見えしして、何卒医道奥議を伝へ給はれかし、御恩の程は忘奉らじと願ければ。先生完爾曰、汝医の道に志深きに(5才) 感じ、医者との奥義を伝授すべし。しかしなが

らむかしの療治は今の病人にはとんと間にあわず。さればとてむかしの火が今はつめたし。昔の水か今はあつといふともなけれども、その風義の替ることは雲泥の違ひなり、爰を譬へをもつて言聞すべし

○抑昔の小児をおどすには元興寺などいひ、或はうそつけは地獄の釜へはまるなどといひてしかつたに、こわかつたものなれども。今はそんなこといひて子供をしかれば。些はまつて(5ウ) 行水して見たいなど、言て嘲哂をする、又地獄の絵などを見せて威したるものなれども。今時はそんなとろひことでわかるやうな子供は老人もなし。又昔は寺子屋へ手習ひにやらんと思へは、先師匠の筆法手跡を撰て弟子入さしたる也。師匠も手習ひ子がおうちやくなれば竹の根むちを以て打擲し。或は机文庫を背に負せ、追出せしものなれど。今は師匠の方から機嫌とて、折々はまんぢうでも又錢安て数の有菓子でもやつてたらし込(6才) なんばおふちやくものでも手習ひせいでちつともしかることはなく、若師匠がやかましうぬかがさいで、直に寺あがつてこますと。寺子同士の咄してゐるを影より聞及び師匠是をわがつてびくくしてゐる也。親もまた子供をよふた、す師匠はえらひ上手ものじやなど、言て誉る也。子供盛人して一生身に徳に成、手習ひを教へて貰ひし恩はと思はす、寺あかるがさいご五節句二季の札に行のも、とろくさいやうに思ひ師匠の方へ再び見むき(6ウ) もせぬやうなる薄情なること、是むかしと今は大ひなる違ひなり

○むかしは金の貸借の証文の留には。若返済いたさねば。我等
人にては無御座候為後日仍而如件など、書し也。又私に物不
被仰候も一言の申分無御座候為後日仍而如件とも書しもの也、
むかしの人気是にて押量り知るべし。今の証文には誠に芝居の
番付見るやうなる無流様々の文句を書ならべても返しかめる
也。かねをかへさねば。人間の交りもならず、大なる(7才)

一六に聞京学も医事にして絵師かとくに入し門也

南陽館草陽(7ウ)

庭訓の往来みちも長きかに杖をつかすな三月の比

恥なりと思ひしものなれども、今は貸方から借方若機嫌が損し
はせぬかと、こはくによ私方も此節は不時の物入が続きま
して大きに差支まして難義いたし居ますゆへ、いかふぞなりま
せふ、なら何卒御憐愍愍御慈悲を以て此節御返し下されまし
たら、御恩の程は忘れおきませぬ、何程か有難ふ存升と畳に天窓
をすり付、なみだを流して頼みければ、かつた方は大きな場で、
夫は氣の毒なものなれども、御前の方に不時の物入があつたと
てこつちの知つた(8ウ)ことじやない。世間一統しれたこと
じやソリヤどつこでも有ことじや、それじやによつて常に何角
随分氣をつけて儉約をして置ねばならぬ、勝手づくなことばか
り言人じや。こつちじやといふて方々口数借の多いことなれ
ば。世間体も有ものて御前の所ばかりゑこひきならぬ。何分
損はかけぬ来月晦日時分には工面でもよければ。少々成とも遣

しませふ。夫も恥とはしれぬ、これも其時のあんばい次第ジャ
とねつからとんと如才のない氣シヤテイとつかまへ所のないや
うに云廻せは(かしした)「夫(9才)てもわしに物かした人は大
船にのつたやうなものじやと。おつしやつたではござりません
か」(かり方)「ハテ契合点の悪い何時どのやうな大風が吹て舟
しやうもしれぬ。そこで浮世といふたものじやワイノ」ト(か
し方)「利屈に詰られもちくとしてどふぞ左様におつしやらず
と爰がほんの御助といふものでござり升、とかく御情でなけれ
ば立行ませぬどうぞマア此節御返しなされて下されませ」と頼
ければ(かり方)「ハテサテ吞込かよさそふで合点のわるひ人ジ
ヤやらぬといふのじやない。此(9ウ)せつ廻りはわるふて御
留主でとんとできんと言のに。なひものを取ふといふは近比
無利といふものであるまひか」などと言。むかしは極の日に喧
嘩したり鍋釜を引ぬいたり大晦日夜通らしにて戻つたり。又借
方も払をせねは大きわが越れぬなど思ふたものに。今は春早々
杯と言逃して心よく正月をする。当世借方は強くかし方は弱く
極の日もわづかな売かけもよき所でこわくあなたへさんじ升の
も、ほんの御門を通ります、御序ながらで御ざり升など、(10才)

世の中もやくそくの時たかわすに春は追／＼かへるかりかね

きくき(10ウ)

手桶をは捨くらへなよ京の水たとへ浮世にすみ通るとも
只も貰ふか合力でも受るやうにいはねばならぬ時節なれ、是む

金英(11才)

かしと今は大なる違なり

○丁稚鼻たれ小便たれる時分より。天窓のてつへんから足の爪先まで主人の世話になりながら其厚恩もおもはず独り盛人したやうに思ひ。元服する時分より最早茶やへ行ねばならぬやうにおもひ友達を拵、同輩の手代若ひもの同士寄合ての挨拶にはドウジヤ何ぞおもしろいことはないかイヤモ黒犬の尾でとんと(11ウ)おもしろふないホンニ此比は荒神松の川流れでとんと真がうかぬエライしゆみかたで居る、其くせに此節約束をく、り付られ其上に無心に言かけられてゐるのも、わしが男がよひ計しやなひ。ゑらひ粹じやと思ひ向ふからよつほどのおきせんから、どうも義理詰になつてあほらしい跡へも引れず。きり前にはいつでもしよく気が悪いはつといた所は極楽のやうなものなれど極前には地獄じや。外から早ふ戻ると親仁の顔が地獄菩薩のやう(12オ)に見へるが遅ふ戻ると焰魔大王のやうな顔に見へる。鼻の良は青鬼赤鬼。ばゞの顔はしやうづ川のばゞ、おれが心一つから色々に見える。戻つた時のぐはいのわるさ、そこで戻りぐから丁稚でもしかり付ねは手にはがわるひ、どうでおれがやうな切手は少々な事はある内じやが若宿這人前には鼻から先へ拵ておかねば面かわるひと只手前の勝手のよきことばかりを思ふてとんと主人へ忠義のことは思はず丁稚の時に始めて主人へ目見への(12ウ)時の心が替りさへせねばよひものなれと。尻があたゝまるに順ふて。材木違ひなる了簡ができ。纒なことで手形をやけば、世間体がわるひ、しくじるからは是は

といふ程のことてなければ外聞がわるひなと、いふやうな時節、一向何のことやら分がしれぬと言もの也

○女子衆の出替り目見へには御使がござりましてはどふもなりませぬ。御供が度々ござりましてはどふもなりませぬ。御子達様はいつちいやなもので御ざりますがどふ(13オ)でござり升「三人あるわいの」「へい御壱人でさへいやなものに沢山そうに御三人もござりましては。つまりませぬ、定めて御乳母とのがござりませふ、是が又とんと馬の合ぬものでござり升シテ御ばゞさんが御ざり升カナ」「アイよけはなひがひとりあるはへ」「へいこれはとことも六かしいて、やかましいものにきわまつてござりますれども、ならふならどふぞ。ほり出してはしまはれませぬか」ソシテ御宗旨はマアなんで御ざり升、フウなせ宗旨を尋ねてじや、へい(13ウ)門徒衆でござりませぬは何角に世話が多ふてなりませぬ、シテ又店の若衆は格別無細工な男はござりませぬかな。中戸のしまりはきびしいことはござりませぬかな。養父入十日になさつて下さりませ。からだか少しよはふござり升ゆへ。月に十夜さばかり灸すへにまいらねばなりませぬ。つとめとおつしやればつとめませふが御子達と。ばゞ様は出して御仕舞なされませなど、いふむかしの女子衆は。目見へしてどふぞ奥さんの御氣(14オ)に入ればよいが若御氣にいらねは外聞かわるひやうに思ふたものなれと。今は主人の方から早ふ置付ねは世間からさまく、の取さたすれば置つけるのが遅ひと外聞がわるひやうに思ふ時節なれば。是むかしと今とよ

つほとの違い也

○むかしは娘の子を嫁入さすまへに。娘に親か言聞すは、ア、ゆらの介夫婦の衆々孝行尽して。婦夫中むつましいとて。あぢやうにも。りんきばゝしてさるゝな。たとへ(14ウ)夫にあかれて又の殿子をもふけなよと言聞せ、とかく夫に真心は勿論、第一には舅姑に孝行を尽すべしとくれゝ娘に言聞せて、嫁入さしたもののなれど、今は親からしてのつけにぢゞばゝ、かこまり入たものじやが。よつほどばゞがむつかしもので。やかましいげな。ついいきそうならよけれども。ゑらう達者などいふことじや、とうもほりだされもせず、めいはく千万なことじやイヤゝゝしかし辛抱じや格別長ひこともあるまひ、又随分智を(15ウ)

獅子にめす手際はとまれあふむまの

はなし飼なく三人かちゑ 案山子 (15ウ)

縫ものゝをりゆるこゝろはせきれいの

尻を結んたいとし子の縁 金英 (16ウ)
たらして頭の道具などを拵さす肝心じや又外におきせんても有か東辺へしとつて借金でも出来そうならちやつと早ふ目先きかして埒明て戻るか勝じやぞや、又外へやらねばならぬ。難義してからねだる所がないぞや。ソシテ嫁の方からしうとめを。いちりつておひたがよいぞやヘイゝといふて居るとつきあがりがるぞやなど、親が言聞すやうな時節也。むかし譬へにさへしうとめ祖母が嫁いぢるやうなといへど、今は嫁がし

うとめ祖母をいぢる(16ウ)といはねば気がつかぬなどゝて笑ふ也。中々今時のしうとめは嫁そしるやうな祖母はとんとなし。しうとめは年の功で物毎にやう気がつく替りには少々口やかましいもの也。嫁は色けが有ゆへ。和らかでよけれども若いかげんで物毎にとん気がつかぬものなれば。先是はどちらがどうでも喰ふて見ぬは。とつくりとしたことはしれぬものなれば。何分むかしは。加古川本蔵にもちつと念を入て舅姑に孝行尽すべしと言聞せたものなれど(17ウ)今はのつけに祖父祖母がこまつたものしや、しかし格別長いことはないなどゝ娘に親がいひ聞すやうな時節なれば是むかしは今とは大なる違ひなるべし

○むかしは男は男らしく女は女子らしう。したもののなれど今は男の若ひ形して天窓を締で巻、女子か羽織を着るやら娘の子に三味線ひかぬものなし。女のかもゆひに結さぬものなし、最早そゝゝと女の髪結が出来そうなやうす也。近比は女の懸取か流行もはや(17ウ)追つけ男がいもじをかき、女がふんどしをかくやうにならふもしれぬ。むかしは女の髪を髻にてたばね。竹のかうがいかなざしに木地の櫛さしたるもの也。かづらにて髪ゆひしもの也と聞。油にて結あがよつほどの奢になりしとも、聞及ふに。近世は匂ひ油元ゆひ。のり引の丈永などはもはや古くなり。今は無流さまゝのとんぼう緋鹿子の根ぐり浅黄紫又染分。金糸銀糸の根てり金銀の丈長或は櫛かうがいかんざし。衣類でんつきゝ当世風(18ウ)の新もの数限りな

きことあげてかぞへがたし、誠に天窓をなぶりものにする也。化粧は。うつすりと紅白粉に極りしものを。化粧下とて玉子やら。ふのやきやら。又しやうゑんしやら。和尚やら。首筋はふじの山或は二本足三本足四本足毛だもの、やうに思ひ。耳のうしろをするやら。けづるやら。天窓の真中に金ものを打つら実際に顔から天窓をちやりさいぼうにするといふもおろかなり。最早此上は。しやうもやうもないゆへに。胸から腹へかけ(18)うて高蒔絵をかき。背なかから太股尻のわれめへかけて極彩色にするやうになり、誠に女のはづする時節なり。節季前に通書出しのべ高の多いのは呉服屋小間物やなれば、主是をみて何ゆへ此様に小間物や呉ふくやの買物か多ひといいば。女房むつとせきあげ。いかりの眼に声あら、けやア、費らしきもの一つもなし、通書出し一々に。ごり押にして吟味せよ付落はあるとも付掛はないゾ世帯廻りの無益(19)オなるはしたなき入用にあらう、忝なくも女房娘の身の廻り。おなご一卷の大切な所の御入用なるに夫になんぞや軽々敷呉服屋小間物やの買物が多ひなど、は。きよくがないやアどのつらさげてそのやうなのび過たるおとがひ叩くサア今一言いふて見よ眼にもの見せんときめつくれば。夫主は顔うあかめ、これはホンナ商売向の入用かと心得まして。女子一卷の入用のことを存たれば。何しにべ高が多ひなど、は申ません(19)ウ以来は急度嗜んでさやうなことは。申ませぬと誤り入てぞ居たりけるやア日比馴染の我夫ゆへ此度のことはさしゆるすが。重ねて左様な心得違ひの

過言をぬかすがさいご呉服や小間物屋の是迄の買物高を。三増倍五そうばいにして。問屋の払も出来ぬやうにするぞと、女房にしかられて只へい、と漸々につらふくらしボイ、とぼや計がせいさいなり。されは今時の女夫げんくわするとも辻も夫が女房に勝ことならず(20)オ

不行義も直せ床几に腰かけてかたはらおろす涼風の手に

四穂園(20)ウ

むかしは夫にしかられて。女房顔をあからめ只うつむいて。誤り入て居たりしものなれども、今時は中々さやうな事は夢々なし。女房にしやべりつづけにいひこめられ。是を長ふ相手になつてもはじまらず日間の費るばかりにて埒の明事なきゆへに、世間一統女夫喧嘩の尻のはねは。どうなつと勝手にせいといふかはね也、實も世上の女房を山の神といひ伝へても此時よりぞしられたり(21)オ

○むかしは我家来我子に物を言に。どふしや。こふしやと言たものが今は我子や。我家来に。どうしなされ。こふしなされ。どうしておくれ。こうしておくれといふが当世のことばゆへ。我がや家来も返事のするのにモウそろく、とヲ、くといふ返事をするやうになつてゐる也、これむかしと今は大ひなる違ひなり

○むかしは淨瑠璃の文句には夫を思ふ念力に石となつたるたれしもありと言。是を今の浄るりの文句(21)ウていはふならば、夫を思ふ念力に蛸になつたるためしもありといはねばならず、

三千世界をたづねても。夫といふはたつたひとりと申しも今は。近所隣をたづねても夫といふはたつた三人といはねばうつりがわるし。又女心の一すぢに思ひつめたるといふ文句も今はそんな、律義な女は中々なし。是を当世の文句ていわふなら。女ごゝろの七筋の中で直打が有そうふな男にしやうとまよふのも。みんなわたしがかぎゆへじやかんにんしても(22才)下きんせと。ぶんやなみだにむせびけると浄留理をかたらねば今時の風にはあはぬなり

○むかしは女の胸を人に見せぬやうに、半糸りをかきあわせたものなれども、今は緋ちりめんの半糸りをわざとうらかへしむねから腹へおしろいし、其白ひ所を見せて気づかせやうにしかけ、またいもじも二布に極つたものをにて。元よりむさき不浄なるものゆへ。すこしでも人に見するは失礼なりと少も人に見せぬやうに(22才)

したものなれど今は人の眼にたつやうに。緋紋縮緬の裾を出しかけ足の白ひ所と、はいあいのよひ所を人に見せて。思ひつかすやうの分別ばかり。扱もく今は女の気がみぢかくなつてきて。当世じやといひて最早かじんの所を少し出しかけて歩行やうに成しなり。物ごと世話しなふなんでも急な間に合やうに只はいいことをしやうくはんする時節なり

○むかしは娘の子は。嫁入するは親しだいものなれど(23才)おなじくなれば。よい男が持たいと思ふは無利ならねども。今の娘はちつと男はわるふても銀のある所へ行たひと思ふなり。

男がよふても。男がくはれるものでもなく。朝から晩まで。男の顔ばかりながめて居てもひだるひ時は腹がふくれるものでもなし。少々男がわるふても着るものをたとと拵へてくれる男の所へ嫁入かしたひと思ふ也。其上にも男がよければ。男のよひだけは別物の口銭で。これがほんのふじのもうふけものと(23才)思ふ也。爰に去る方の娘の子。嫁入前に母親がとふていはく。先達から嫁入口もよつほどいふて。きたけれど。あるはいやなり。おもふはならずと。扱も思ふやうなことはとんとなし。最早彼是といふ内につい年がたけたと嫁入ごろが過て白菌のばゞ様じやのと人がおだてるし。又後妻にもやりとむなしモハヤく娘の子を持ば親のきつい心遣ひなものが。此比いふてきた小間物屋はよつほとよい男なれども。ちと薄ひといふことじや(24才)中人口で薄ひといふなれは。よつほど。やつと薄からふがまた最壹軒いふてきた所は十人並より。ちと悪ひ男なれども。かねがらで歴々の筋目家柄じやといふも中人口で十人なみよりちと悪ひといふ位なればよつほどわるひ男と思はるゝが縁のことは親のまゝにもならぬもの無利に押付けられぬ程にの。そなたの簡次第にしやといへば娘は一生の片付のことなれば。さしうつむいて思案顔。母親見て取。とつくりとしあんしや。せい(24才)てせかんことじやぞやと言てたらして尋れば。娘も漸々に顔をあげ。了簡が極りましたわひなと聞て母親ホンニこれしやわしでさへツイ思案が極りにくるのに早ふよふ了簡をきはめやつたのふハイわたしや両方へ行たふこさ

升ヤアナント嫁入するのに両方へ行たひとといふはマアどふした
ことじやぞいのふアノかゝさんの合点の御わるひとわひなア
屋はかねがしの所へいて。夜さは小間物屋の方へいかふとい
ふことでござります(26才)わいなアといひし也、扱も今の娘
の子は油断のならぬ。むかしと違ふて。よつほとかしこひこと
也と思ふべし

○右申聞すがごとく。むかしと今の風義のかはりたることは雲
泥の違ひなり。さればむかしの病は律義にあつて只一筋なもの
て有しに今時の病はいろく似せもの多ければ当世氣転の療治
ならては癒かたし、此理を能弁ふべし、よつて左に伝授すべし。
爰に亦老若の容儀あれば療治(25才)もまた其容儀に應じてお
このふべし。書法に尽し伝へんと欲すれども説解にいとまあら
ねは爰に老若の容儀を六歌仙につらねて頭はし述る

当世医者風流解上終(26才)

(当世医者風流解中巻)

老人六歌仙

皺かよるほくろができる腰かゝむあたまかはげる毛は白ふなる
手はふるふ足はよろつく歯はぬける耳はきこえず目はうたふなる
くとふなる氣短になる愚智になる心はひかむ身はふるくなる

(1才)

身にあふは頭巾ありまき杖めがね数珠と溫石しゆびん孫の手
聞たがるきにとむながるさみしがる出しやばりたかる世話やき
たかる

又してもおなしはなしに子をほむる達者じまん人はいやかる

(1才)

若人六歌仙

年よりの傍はいやかるけむたかるよきことゆへと聞とむなかる
呑たかるゆすりきたかる喰たかる悦られたかる兎角したかる
遊びこし見へつくり楽ししたしのらかわきたしかねつかひたし

(2才)

よき事はとるふて邪魔てめんどうで小むつかしくていやてなら
ひて
飛あかるほめそやさるゝのりたかるむまひことにはついたまさ
るゝ

いきすきはおよしめかすもげいじまんあなたしけなり粹と仙人
(2才)

当世医者風流解中

是から氣転の伝授

○先病家より丁稚使に來らば。微笑くとして大義を何遍もい
ふてかき餅の二三枚もやりたらしこみ。又何なりとも夫相応の
常断もさすべし。丁稚は口の悪きものなれば。彼かき餅に食
付。先此方を嘗。己が常断をかゝさんため。あの御医者さんは
ゑらふ流行て大勢人がつかへてござりまして。(1才)よつほど
待て居ましたなど、帰つていへば。さほどはやる医者なれば上
手であらふと思ひ。信仰するものなり。扱彼丁稚をたらしこ
み。病人の体を問。家内にて病をなんといふて居るぞと聞置、

其後病家にて以前丁稚の言しごとくを。あんばいやう品をつけ
て。見立をいへば病家は己が思ふごとくに星をさゝれ、扱もあ
の御医者によつほど上手じやそうな。此方から容鉢をいはぬさ
きに。脈ばかりみてくはしう(1ウ)病症を一々口演は恐れ入
たること、大に感ずるものなり

○又女衆の使なれば。十分の愛をもち。にこつらしくおまへは
美人じやといふ氣どりをすれば。女の心の裡にくふはなひも
のにて。悦ぶもの也。扱そふ悦して置いてホンニ御内に御病人が
あれば。台所で御まへがた大いそがしいことではあるまひな
ど、口弁をながして。そろ／＼と容鉢といかれば。とのやう
にこさり升。この(2オ)やうにこさり升など、女によつては
よふ唔るものなれば、ついうか／＼といわして置いて。とくと容
鉢を聞置べし

○又手代など下袴をつけ来らば。茶たはこ盆を出し。少し間を
入れ、出向ひ。少し笑顔して。至極でいねいにあしらい。御病人
はどなたで御座り升シテ何となされましたと言そろ／＼問かけ
容鉢をいふ度毎に徴しつゝ、顔を嚔て夫は御氣の毒といふ為旨を
なし。此程は病家多く廻り繁けれども外ならぬことゆへ操合
随分(2ウ)早く御見舞申べしなど、言べし

○夫から廻りの一段先乗物よりの出端は岡嶋屋のごとくに心
得。容鉢氣取は芝翫を写すべし、しかし取違て。芝居するや
うなあほらしい医者風の風はすべからず。兎角しかつめらしく。
見識は高けれども。ひくめにして居るといふやうな様子にもて

なし面柔和にして至極深切なる体にて仕打をすべし。大病なり
とも少しもおとろかず。薬はきかずともくるしからず。不調法
(3オ)

靈驗もあらたな家へ生薬師朝からまいりの絶ぬ玄関

金英(3ウ)

御見舞といふてかこからたい医ともちよとゑひ

鞘のさし添をして 関也(4オ)

にならざるやうに取廻りが肝要なり

○扱病人に対して脈を見るにぎつと見ず。脈に見へんことはくる
しからず。念を入れて病症を考る軀にて小首を傾け只フン／＼と
ばかり口の裡で何やらわけの分らぬ独り言をいふていかにも町
寧に見れば。左も尤らしくおもはれて病家の思ひ入かよいも
の也

○脈を見る時は腕の出しあんばいにて早見てとるべし。腕上曲
なれば病輕し。中曲なれば中位。下曲なれば(4ウ)病重し。
又手の目引して病の輕重をもおつとりがよくしれるもの也

○小兒なれば脈を見しなに。扱も／＼かしこひ子と其子をたら
し。又親の顔を見ては可愛らしい御子でござり升とのつけに言
べし。扱病は何にかぎらず元皆胎毒と虫のわざよりおこりしと
言べし。又とんと胎毒とも虫ともいわれぬ外の病症なれば何な
りとも外のことをいひ夫から虫がさしで升と(5オ)いへばど
ちらでも間に合ふもの也。脈をとくと見て病家にむかひ。御
小兒さまは。おつしやることがわかりませぬゆへいたしにくひ

ものなれど、そこが療治の手際と申もの。しかし親御さまかたは。きつい御心遣ひなもので御ざり升、随分御氣をつけられませば。御小児のことゆへ。ちつと薬が廻つて御快とぐつと御よろしいものでござり升。しかし余丈のなひものゆへ少しのたべものでも。時氣にても。やう当ります、とかく御介抱(5ウが第一でござり升と随分拔道を広ふ明置べし

○婦人なれば。とれとも血の道のことで御ざり升と言があたりまへなり。兎角巡りがよふなければ何になりともなつて申分がおこります。何ぶんにも御氣をはらすやうになされませ氣がわつさりといたしますと、おのづから御快よふなりますもので御ざり升イヤつい治して上ませふと始終精をつけては薬をもち只機嫌をとりく療治をすれば。女はこれに力を(6オ)得て薬はきかいでも時によつては少しよひこともあるものなれば、其時には薬がきいたと思ひまこし胸がさげれるとぐつと快よくなるものなり。そこであの御医者さんにかゝつてから。ずつと胸がすいて。いきたわしみが治りしと思ひ。信仰も益し。是薬より弁口にて半分の余も治るもの也。座前の療治は大体しれたものなれば。毒にもならず薬にもならずそめいさんだちの薬にて。あへくつてをけば不調法に(6ウ)はならぬものなり。産後なれば血か荒ふござりますゆえ食物の御毒忌が大事でござります。又最一つ御毒忌がござりますと親仁が七十五日を待ぬを制する耳こすりを言聞すべし

○扱額に青筋かたち。かん積持て見ゆれば。兎角物毎忍耐が第

一の御養生でござりますとて。只何ども氣をしづめ辛抱が大事で御ざるといへば、家内の者が。あの御医者さんはゑらひ上手じや(7オ)名人じやと己が叱らるゝを助るゆへ悦んで替るもの也

○心細く氣のつまる性なれば。鬱症が見へ升。ちと心安ひ方か東辺へぶらくと御歩行なされて氣を大やりに御持なさるがよろしいと言へし

○大便不通じなれば。腹の内がいれまして。秘結いたしますと腹を押えてコレ此筋が拘りますゆへと、どこなりとも筋らしいものをつよく押えて病人の腹をいためると成程その所がわるひと思ふもの也(7ウ)

○ごくどうらしき男なれば積氣はすくのおふござれども。兎角濕氣が多ふ見へ升といへば大方は違はぬものなれば。今の内にくと治しておかねは。後には大ことになります。そうならぬ内に御養生なされませ。此俤して置ば後にはいづれ鼻か。ちんぽか落ます落てから焼繼もてきざ。とんと取帰しのならぬものゆへ日々の不自由用向の欠ることが大体めいわくなことでござりませんぞへ。御頼なれば治して上ませふが(8オ)どふものなことは此方から薬をすゝめ升ることはいたしにくひものでござり升。只御為になることのみを存升ので御ざり升などといひひこなすべし

○嫁をとり半年か一年ばかり立ての病氣なれば少々御不養生にて火動のきみが見へます。鰻鱺鰻卵のるいは。よろしいが。

慈姑などは決して御無用、ちと精薬を拵へて上ませふか。急度ましますぜ。しかし御本人の思召しだいと格別すゝめずして。病人(8ウ)方からましたればよびがく思はずやうに持こむべし

○病家にて配剤のことを委敷知りたるは少なければ。病性に応じたる療治のしやう法組などは軍書で引ことを言聞すが病人の耳近ふにてよきもの也。源平盛衰記か太平記か太閤記なりとも只手前の勝手のよき所へはめて言聞せば。なる程至極尤もなる法組見立の医案上手らしふ見ゆるもの也(9オ)

○腰が痛といへば何れこれは疝の気味あつて後にはうごかぬやうになり升。いつでも此節が養生所也と言へし。若本真の疝気なれば長引ものなれば病人の精のつきんやう断をいはぬやう言廻すべし

○腕かいたむといへば筋の拘牽があり。是を治すればいたみは直に止るなれば。ちつとも御氣遣なされなと受合ふて氣を慥かに思はすべし

○長ふ薬をのまさんと思はゞ普請の引ことにて言(9ウ)聞せは分り安し。外の医者やうに渡ししんやうにて療治いたせば。即功も見へますものなれど、とかくしゆふくが早ふ廻り升。拙者は其様な不実意なる療治はいたさず入普請のやうなる療治の仕方ゆへ跡から手の入る事もなく故ごとのとんと出ますことはござりませぬ、廻りくゝては其方が御身の御為でござり升と兎角御為ごかしにて得心さすべし

○外におきせんが出来て内義悋氣深ふ見ゆれば(10オ)腹をと

つて見て成ほど御腹に拘急がござり升、是を治さねばなりませぬ。何ぶんにも男といふものは氣の多ひものと思ひ。兎角御氣を広ふ御持になされませ。おのづから薬の廻りもよふござり升、折角薬かよふきひても。御氣がせき狭ひとやつはり腹がひつはりてもとへもどり升と言置けば治つてもなをらひても言事が違はぬもの也

○何病にても毒忌の多きは病人のいやがるくせに(10ウ)医者を下手にするものなれば。元来治そと思ふきがなければ大体の毒はかまはず。ゆるして。随分くるしうはなかねどしかしながら用心して。あまり毒らしいものは喰ぬにしくはなひと言置は。たとひ毒を食て当つても。麁相にはならず。治つた時にはゑらひ上手のやうに見ゆる也。そこで為の善悪をかまはず兎角病人の氣に入るやうに持込でさへ置ば。日にちさへ立は薬のまひても治る病も多きもの(11オ)

病家さきの見脈とつて好々の腹をさくるか上手なるへし

金英(11ウ)

人の子をかくも恥かし秋の野の不学むまひのうみは解くしなれば治た時分には。あの医者はぐつくと閑狭いはず大場な療治の仕様じや流石大医の学者じやのとひとり治つても上手のやうに言もの也

○療治中、薬はとんときかず其上俄にわるふなることあり病家より此比は病人心持すぐれませず、何となふわるふござり升と

いふ時、即座に空をながめ。何分此比の不順では。何方でも兎角御病人にはやう当るものでござり升イヤハヤ此比の時(12ウ)候ではあんばいのよい人てさへ心持がわるふござり升ゆへ。御病人には些づの御故事はありうちのこととござりますと言拔すべし、惣てわるふなる時は時候にこかすが多く入用なり、又熱病なれば熱のさし引と言拔すべし、又は痰のさし引、其外積氣を呼出しましたなど、言もよし。或は急に悪ふなる時は急変の発りしと言、是は別ことなど、いふて得心さすべし、

附り病はとつくりと治すれとも命の程は知らぬと(13オ)

古方家の言ぬけは古めかしうて当世の風義にあはず、近世は前かきをいひ廻せば、とんなしくしりでもぶてうほう下手にはならぬものとするへし

○嫩人^{ななひと}と見ゆれば脈体^{みくたい}を見て日間^{ひか}を入、得与考^{とくとくかう}へ小首^{こくび}を度々傾けて。小便^{せうべん}か一時に余程^{みよほど}たんと通じませうかなと言べし

○かね持^{かねもち}の隠居^{いんこ}なれば脈体^{みくたい}腹^{はら}を見て何でも虚損^{きそん}が見へます。此俚^{この}に捨置^{すてお}れますれば中氣^{ちゆうき}になり升へい(先「夫はいやなこととござり升アノ淨土寺村^{じやうどじやうむら}の中(13ウ)風の灸^きにどふでござり升」

(イ)「イヤモあれもあれでござります」(先「ヘイアノ鳥犀園^{うしぎえん}はどふで御ざり升ナ」(イ)「それはほん中風に成てからのこととござります」と。こぼたづにいふべし。しかし此方の兼用に用ひられませふといへば。薬^{くすり}がきかずとも手前のしくじりにならず。もしくぢつた時は余所の薬^{くすり}をそしつて。我下手^{わがへた}をかくすべし。又其薬^{そのくすり}で癒^{なを}るも此方^{このほう}の手柄^{てがら}になる也。只今^{ただいま}の内^{うち}か御養生^{ごやうじやう}

所でござり升といふて長ふ薬^{ながくすり}を用るやうに言べし(14オ)

○氣^きの長ひゆつたりとした性^{しやう}分^{ぶん}なれば。腹脈^{はらみやく}とくと考へて。此御脈^{ごみやく}体^{たい}にては物に御氣^{ごき}のせくことは御ざり升まひ。何でも余程根^ねの御丈^{ごぢやう}夫^そな所^{ところ}がござり升れば御性^{ごしやう}分^{ぶん}に応じました薬^{くすり}を用ひますれば。御快氣^{ごくわい}に疑ひはござりませぬといひ。死^しのと生^{せい}と夫^そはとんと貪着^{こんぢやく}なく只氣^{ただき}を安ふ丈夫^{じやうぶ}に思はして。ながふ薬^{くすり}のますやうに心得^{こころえ}べし

○頭痛^{づうとう}がすること^{こと}言へば、是^{これ}は元^{もと}のぼせより発^はりしこと言(14ウ)べし。又逆上^{のほりつよ}強きといへばふらつき有て。足^{あし}の踏立^{ふみたて}確^{たしか}とは

いたすまじと言べし

○熱^{ねつ}の有なし。問^とれし時^{とき}。有無^{うむ}分^{ぶん}りがたければ。熱^{ねつ}も少しはあれども。格別^{かくべつ}の構^{かま}になる程^{ほど}のこととござりますまいと、どちら

へもつかぬやうに言て返答^{へんた}すべし

○至^{いた}てたばこ好^{すき}なれば。折々^{せり}目^めがぐらくといたしませふがな。底^{そこ}に痰^{たん}の有^{ある}性^{しやう}にて。是^{これ}は表向^{おもむき}はよふ見^みへても内証^{ないしやう}の腹^{はら}ぶんがよろしからず。病^{びやう}のおもらぬ内^{うち}。痰^{たん}のむ(15オ)すばれぬ内に御養生^{ごやうじやう}をなさつておかねば。末々^{すへく}の御為^{ため}がよふござりますまい。しかしかやうに申せば。いかふやう薬^{くすり}をすゝめ升やうにござれども。今より末^{すへ}は長^{なが}ひとゆへこけんさぎの杖^{つゑ}と申ことも。兎^うにつけ角^{かく}につけ。御身^{ごみ}程^{ほど}大^{おほ}切^きなものはござりませぬ。譬^{たと}材^{から}宝^{たから}数^{かず}多^{おほ}積^み置^おとも。五^ご体^{たい}を失^{うしな}ふては。何^{なん}の益^{えき}も立^たぬものでござります、古人^{こじん}も悪^{わる}人^{にん}は身^み命^{めい}を捨^{すて}て金銀^{きんぎん}を貪^{むさ}りてのたまふ也。かやうに申も。前々^{まへまへ}より御馴染^{ごなじみ}深^{ふか}ひゆへ真実^{まこと}に存^{ぞん}じ(15ウ)まこ

とゆへのござり升。真実を人に教て足らざることなしと
聖人もたまはく。聖賢の跡をしたひて申事でござるなど、言
聞せば。律義な病人は実に諳て。もし重つてからは大ひにこま
ります、どふぞおもらんやうにして。早ふ治る御薬を御頼申升
といふて、なんでもなひ纏たばこ好ぐらゐなことでも。持込や
う言様によつて大病になる下地のやうに思はし薬をのますべし
(16才)

○至てむつかしき九死一生の大病人始て見るには。脈体腹手足
爪惣身の肉まで得与念を入至極叮嚀に容体を窺ふべし。眉を嚙
て只フウ／＼といひ口の内にて独言をいふて薬箱へ手をかけ
ず、顔をしかめ小首をかたむけじつとして見合居へし。其時病
家はかたすを吞で心配をして。下地の医者薬を持出、是御覽
なされて下されませと差いだす。これを見て少し首傾け。思案
も有体にて。下地の薬を見て(16才)こほたず随分如才のない
尤なる薬てござる。やはり先此薬を用て御らふじませといふべ
し。下地の薬てやうないゆへ頼し医者なれば。左様なら下地の
薬用ひませふといはぬことはした事なれば。大きな場で。下
地の薬も随分無利ならぬ配剤なと、いふてばかり居れば。「下
地の薬でもおもしろ御座りませど何卒あなた様の思召にて御
調合下されませと相願ふ。そふ願はしてからでなければ。若受
取てしくじりにならぬ為なり。(17才)左様に拙者に御頼のこと
なれば。よぎなく調合いたしませふが甚以てむつかしいじや
テイ何分此暑では先土用を御こしなされたり、御取続もできま

せふが。然れども俄に此痰といふものがとふもむつかしいもの
で。何時すつと差発てこうやうしれぬ。なれども少しでも御食
事かましたらまんざら案じられたものでも御ざり升ますまい。
平生好きなものでも此節はいけぬものじやが。先常々このまれま
す物でも又はとつけもなひものがよふ納ることもあるもの(17
才)なれば色々と手をかへ品をかへて御食事を上られませ。何
分薬よりは食事がかんじんで御ざり升、寿命さへあれば命に別
条もござりますまい、病と寿命とは別なものでござる先調合の
薬あげて御らふしませ。切々御大病て甚むつかしい。とかく御
介抱が第一でござりますなど、同じ言葉品を替へ至極深切ら
しく遣ふべし。病家は大事の病人に氣をとられ心遣ひの中なけ
れば。医者が尤らしい顔付て同じやうなしたことを。あちら
へぬらり(18才)こちらへぬらりとした前置をいふてもとんと
氣のつかぬもの也。扱一兩日二三日も見舞ても。御影てと言声
がか、らぬは。やがて病家より断を言へし。其断をいはぬ先
に。此方から。又余人にても見せて御らふじませといへば。却
て信仰もましてやはりあなた様の御苦勞様に預りたふござりま
すれども。余人にてもと仰られますからは、とふもいけんとの
思召で御ざりますかなイヤ／＼さやうではなければどもホンノそ
こが用心と申もので。かやうに申ものを(18才)大事に存ます
からのことで御ざり升といふもとかく引導を次の医者に譲る工
面にて。そろ／＼と逃尻をいふは。病家もせんど評義の上、替
たる医者のことなれば。せんかたなく。さやうなれば。あなた

様の思召の御医者様でも御差図下されませといふ。其時兼て大医の組下となり置。フウ差図と申せば先当時流行の大医。勇摺弁口へ見せて御らふじませ。拙者が申たといふて使をやられませねば。此節病家数おほくゆへ参ら(19ウ)

重いのも軽い医論の長羽織着たるすかたにおなしふところ

草さと 19ウ・20ウ

ぬやらもしれませぬ。必々御忘れなく拙者が差図と申て呼に御やりなされませ、何時なりとも立会まして評義に及んであげませふと深切らしくいふて。跡をとる工面か第一なり。扱勇摺弁口見舞の節、氣転頓作の薬を見て。扱もく頓作の配劑何も角も能行届ひたる尤至極の療治なりと誉も。兼て言合ある仲間なり。同類なれば相互に医者薬屋は人の知らぬか秘事なりと知るべし(20ウ)

○娘の子の病人なれば。微笑くと笑顔して容軀を聞、脈体を見て。扱もいじの悪いもので御生質のようつくしい御子へ。兎角およはふて。なりませぬなどゝみすくしたあぶらにもまんざら腹の立やうにもなければ娘の子も母親もアノマアおつしやることはいないア此方の娘はよつほどふきりやうなくせによわふござりましてこまつて居ますと。やつはり娘も母親も心の裡ではうれしい氣味なり。そこで御氣つかひなされ(21ウ)ますなツイ治して御あげ申ましょ。しかしちと岡嶋屋ても見に御いでなされませ。御氣ばらしに宜しく御ざり升。芝居もよろしいが。また野かけもよいものでござり升。実は薬よりはそん

なことがよふきゝますものジャホンニ琴三弦は御嫌ではござりませぬかナ人にひかせて御聞なされてもよろしうござります。御食事のにとんと御毒忌には及ませぬ。何なりとも御好なものをあかりませと。きけんとりく容軀を聞(21ウ)其口について手をかへ品を替、上手をいふてとかく病人の為にわるふても。氣に入るやうに持こめば。扱もマアあの御医者さんは。何にならぬ角はならぬのとおつしやらず高ぶらずして。やはらかで其くせいやみのないすつぱりとした薬もとんとうらぬホンニ能御医者さんじゃないかいナなど、評判して。ひいきがつき馴染も重り。其内にはつゝ義利かかゝりツイうかゝるときゝもせぬ薬を長ふ呑もの也(22ウ)

○腫物が多き性分と見ゆれば。是則小児の時の胎毒也。大人となりて湿氣を催す也。酒を過し肉食を好み。身持不養生する時は。何れ鼻が陰茎が落ずにはおかん程に、とんと今の内実々養生所ジャなどゝたらしたり又威したりして長ふ薬を呑し。纔の腫物氣位なることを重く言て本真の湿病と仕立上るが上手なりと知るべし

○日々病人を見る内一寸でも御蔭でどこかようなり(22ウ)ましたとか。愛がよいとか御蔭と声がかゝりし時は先してやつたりと思ひ安堵すべし。夫はよい筈ジャト言會釈にて。其時はちと世間咄し。芝居ばなしなどあしらふてもよし。まだ御蔭と声なきうちは決して長尻長断など致べからず。とんと御蔭の声もなく只同へんくとかばかりの声多ければ。是則断まへと悟る

べし。其時何角に氣を付最暫くすれば全快するといふ氣取をして逃道も考へ明置べし(23才)

○夫々病家先断をいわさず。弁口にて持直し。長ふ引はる秘法あり、後日伝授すべし後編を待給へ

○風治り口最早月代そつてもくるしうござりませんかなと問し時熱の有なしも分りかたければ。定めてもはや御頭かかゆむしや／＼といたしませふがなといへばハイもはや月代がそりとふてなりませぬへいさやうなれば御そりなされても苦しうござり升まいと、病人の氣のつかさるやうに言葉にこして。しかし第一兩日御見合(23才)なさるにしくはないへいもう風呂は大事御座りませぬかと問さやうに何も角も一時にはよろしう御座りますまひ。一つ宛になされませ。御当りなされて今度の引かへしは。むつかしう御ざり升、跡で取かへしとなりませぬ、風呂も第一兩日御見合なさるにしくは御座りませぬと言べし。何分しくはない／＼の言葉は医者秘蜜の言葉遣ひなりと知るべし

附り 都て髪月代などを問時分には最早よい時分也(24才)されとも夫からいへでも第一兩日と言置はたとへかまわす月代ふろにあたつても。あたらいでも不調法下手にもならず。其間は薬も売るなればもはや髪月代して風呂へ入て気分かよふなると。うまふもなひ薬をかね出して呑ものもな

ければ。とかく髪月代風呂などは一日でも引はるかよき也○我戴医なりとも。病家先にて大医に出会ふことあり、其時微も

おめ憚ることなく我座を動かず拙者先達てよりの配剤はかやう／＼と少しも億せず述るなり。大医これを聞病性にあらざる無(24才)茶法組なれば。是法組は古方後世にてもなし何れの法に出し方組なる哉と問。其時答て言は。拙者は古法後世にあらざる一味配剤にして予が家一子相伝の法也と言拔すべし。されども理にも法にもとんとあたらざる配剤ゆへ。大医と争論に及し時は何なりとも出たれめに言べし。非学者論にまけずと利を非に曲、非を理にまげて言勝べし。必ず言負べからず。大医に戴医か出会は美に一文の黒砂糖を(25才)十に割たごとく。猫に迫れた鼠のごとく左も見すばらしきものにて、一向値打がないと言ばかりにて。おとなしい人柄じよのとはいはじ。只笑われる而已のことにて。誉る人は一人もないものなれば。とんと椽の下舞といふものなれば。何の無益の費のかいなり。譬へ無利にもせよ勝たり勝じやと思ひ。われは戴医なれば負ても恥にならず。大医は勝て勝はづ手柄にならず負ては恥なれば。七分のよわみあり。されは戴医少しもひ(25才)げずるに及ばず病家は医者のこととはしらざれば言勝た医者の方がどふやら学力か有やうに思ふものなり。とのやうに戴医が大医を言こめても医者が減多に病家先にて胸ぐらとり天窓を張あふほどの喧嘩はせぬものなれば、少しも氣遣ひに思ふべからず。よしつかみあふことありとも病家がじつとして取さへずにはおかぬもの也と知るべし

○療治中にしくじりし時の言抜やうは何事によら(26才)ず時

候にこかして仕舞べし。又熱のさし引発さめ、熱の往来、又痰のさし引にて積氣を呼出す。或不時の急変など、いふ其余は是に順じて手を替、品をかへ、臨氣応変時々の見計ひにて言ぬけすべし

○容跡言葉つかひのことは何を言てもエ、成程くと言。又何病何性にも或はりうるんの氣が見へる。積氣の氣が見へる。痰の氣があると(26ウ)何でもけがあるとさへ言置は手にはつよきものなり。此けの字を忘るべからず。又何をいふてもさやうじやくもぬめた言葉にてよきものなり。前にもいふごとく。しくはなひ。しかれども。されとも。さりながら。又何をいふても。そのはづのことく右大役是らのいはいづれの所へ遣ふてもよし。又御ざり升といふことは極りし時つかふこと葉なれば、もし違ひたる時いひぬけしがたし。よつて。御座りましよ。といひ置ば極(27オ)まらざることばゆへどちらへこけても言拔がし安し。どふで御座りまシヨウこうで御ざりまシヨウ此シヨウくはいづれの所へ遣ふても。ことりくと能はまること葉つかひと知るべし

当世医者風流解中終(27ウ)

当世医者風流解下

○病人は基より病家の介抱人召遣ひの子ものに至るまで。よく氣ふくをさ、ねば何ほど名医なりとも信仰して呼にこねば病を治すと不能。先病人はもとより傍廻りは大事なり。既に聖人の曰乳母せしめんとほつすれば。先其子を能愛すべししかうして

後父合にも及ふといへりされば。病を癒すには病家の傍廻り病人介抱人までの氣に(1オ)いらねば療治はしがたし、其氣に入やるは大体左に顯すなり。但し薬にあぶらは忌ものなれども病家には少しづゝにても。油を用ひねばならぬものと知るべし、しかし其油の製法配劑調合の用ひやうに法組は。至て蜜事口伝の法なれども汝に伝へ申べし謹で相伝を受けべし

氣転頓作先生秘伝油の製方

○かんしやく持なれば。御氣の真直な少しでもいかなだ(1ウ)ことの御嫌ひな御性分。扱もくけつかうな御ことで御ざり升。我々は兎角に物ことを。やりなぐり升。とかくあなたを見習ひませねばなりませぬなと、ほめそやすべし

○取締のなひ大風に灰といふ人なれば。扱々御氣のさつはりとした。とんと氣のをけぬ物ごとにしう着せぬ。胸の広ひ。我々のやうな愚まいものは。些あやかりもので御ざり升。扱もよい御氣性ジャト言べし(2オ)

○しわんぼううなれば御きまりのよひ御篤実な御生質シヤとかく今はけんやくをせねばなりませぬ。あなたは醬油は何ほど御取なさります。油はとこで御買なされま、此間此方は。割木をなんぼで買ましたが。よつほど安御ざり升。大きに徳用なものでござり升。ちいと何角に氣をつけて儉約いたし升と。大きな違ひなもので御ざり升など、言。とかくあなた様のやうにきまりますと身上のためには宜しうござり升など、(2ウ)しわひことばかりをいはねば馬があはぬものと思ひ始末けんやくする

を誉そやすべし

○錢遣ひのあらひ性分なれば。御氣が広ふてゑらひ切れ手ジヤゑらひきれものじや。ゑらひすつはりものじや。なんでもしやんくゝと早ふ埒を明る御方じや。何ことでもよふものに御氣のつくよい御方じや。扱もくゝ氣の大きなゑらひものとほむるべし

○ごくどうなれば扱もよふ人なれてやはらかな何をいふ(3才いふてもとんと腹も立ず。よふなれたものじや。なんでもよつほど元手の入つてある御方。そふしてゑらひ粹じや。真ことに真綿が羽二重肌じやなと、誉そやすべし

但しごくどうのくせにゑらひかんしやくもちで。其くせにゑらひ。へんくつものもあるものなり。是は格別の沙汰一向論なしといふもの也

○女子は生れつきのよきもあり。あしきもありさまぐゝなれども顔の内に眼元が可愛らしいか。鼻すぢがよふ通りしとか。色が白ひとか何なりともとり所が(3ウ) あるものなれば。其中にていつちのよき所をさしてアノおまへさんのやうな。目もとの可愛らしいおかたは。めづらしい。めつたにあるものではないなどゝいふて誉るべし、既に聖人も悪をこらさず。善をあげよと。のたまふ也。されども又一向取どころもなし。実の本値打なしと言女子なればどこやに。思ひ入が有て。いふにいわれん所がうまさうで。好味のありそふな御方じやと言てほめるべし(4才)

箱入にひざ立前し茶せん髪ほめられて母傍に手つかぬ

○本土氣といふわるなれば。へつらひなしに正直そうでとんとつくらひけのなひ。本うぶといふ。むつちりうまそうない御方ジヤと言て誉るべし

○中品の人の自慢咄しての好なる人なれば其大をいふを得と聞。ヘイくゝとばかりの返事では興かなし。是はけしからぬ御事て御さり升コレハきよふとひおこで御さります。扱もくゝ

あきれ入ました事で御ざり升などゝいふべし(5ウ)

○上品の人の自慢咄しの返事にはコレハハヤあきれ入ましたコレハハヤ中々をもつて恐れ入ましたおこでござりますイヤハヤくゝさやうな義を承りますと感心いたします。中々以て万人に勝れた御事でござり升といふて誉るべし

○下品の人の自慢咄しの返事には貴様はなんでもよふ埒明る一向玉しや面屋の火事とやらで顔役じや扱もマアゑらひ顔なすものじやナアといふて誉(6才) べし

○男自慢の人なれば。おまへはとおおもふてかしらぬども。娘にもせよ。女子衆もせよ。女房後家尼もせよ。一駄おなごのすく風じや。何でも女子の風上にはとんと置ぬ御人じや。何分女にすかるゝといふは一ぶんの御徳じや。どふぞ。わたしらもあやかりたひものでござり升といふてほむるべし

○附り 余りほめ過ればへつらひのやうにもあれど。どんな遍屈ものでもほめられてゑらふおこる人もなひもの也、当世は真ことなと言ては人の氣にいらすゝしれたあ

ぶらでもながせばうけのよひ時節なり其いはれをたとへも
つて左に述知らすへし

○爰に去る方の女房。当年五才になる児をつれ。知るべの方へ
些用事ありて行しに。先方の女房出むかひ。コレハくよふま
あ御出なされました。まづく是へ御通りなされませと。其言
葉につれて一間へとをり。先此間は打絶まして御目にかゝりま
せぬ時分柄殊（アオ）の外寒さにむかひまして御ざり升。い
よぐどなた様にも御揃ひ遊ばしめでたふ存ます、わたくしも
兼々ちとく御見舞も申上りはつながら。何角と用事に。取紛
まして。其上子供は大勢になりまして。手が引まして。何とな
ふ。世話しう。暮しまして存じながら御無沙汰いたします。其
段御ゆるく下されませと。物こしのしとやかにあいさつを述べ
れは。先の女房これはく御心もしに思召よふこそマア御出下
されました。わたくし方より（アウ）御たづね申ますはづで御
座りますれど。此方の人も此ごろ有やうは売用を言立にして。
東辺へしこうれまして。夜どまり日留りとんと内で寝られませ
ぬ。ゆへ。どつちも得出ませず御ぶさがちに御座り升。其だ
ん御ゆるし下されませ。又夫ばかりのことなれば。かまひませ
ねども外にまたおきせん口が出来ましてこまり入ており升、ソ
レハくマアしかしどうでとの達のことゆへ。些づゝのことは
あり内で御座り升ソウ口演ゆへ（8才）御咄しますが必外へ御
咄しは御無用で御座り升か、此方の人は東辺へは参られませぬ
が。とかく内の女衆をやうつまみ食をいたされませ。是は東辺

へこつたり外のおきせんよりもいつちわるひことて御座り升モ
ウく大ていごうのわいたものじやござりませぬ。内が乱にな
りまして。店のものゝ制とうが出来ませぬ。此節せんだくもの
かつかへてござり升や。漬もの時分で。こうこのおだい。く
もじのかぶらも松崎からも。吉田からも来て（8ウ）ござり
升れども。腹が立ちますゆへ小屋につんで其俵にしてほつたらか
して御ざり升。わたしもごうがわきましてナ捨ぶち打ます氣に
なりまして廻りくはやつはり内の損でござり升。此方の人
もそんなことになつてはやつはり内が付ませぬ。此方の人と一つになる
やうな女子衆は出替り前なら最暫くのことじしやと思ふて辛抱し
て。出替りには出して仕舞ますけれど出替までよつほど間が御
ざりますれば。中途でもかまはず。とつとく出し升けれど（9才）

ついしやうをながすあぶらのぬるくにと

口にまかせてうわすべりする　くだ巻（9ウ・10才）
世間からはそんなことはしらず。あこの御内義は人遣ひがわる
ふて女子衆が半季またずに中途から隙とつていぬげなと近所か
ら評判をうけましていとふもなひ腹さぐられて。きつい迷惑な
はわたしで御ざり升。女子衆がよそで出替り養父入いたします
といつても此方へ参りますもので御ざり升。けれどわけのわる
ひことの有た女子衆はヨウしたものでござり升、あしの裏の生
疵で覚へがあるのはこそと申ませねどやウ此方へは参りませ
ぬ。やういたした（10ウ）ものでござり升、又そんな事のなひ
のは。出替り戴入ごとには。きつく参ります。あなたのは

外そとでのこととよろしう御ござり升しやう、外そとでの事ことは目めで見みませぬこと
ゆへそやうには御座ござりませぬイエ／＼見みませぬことしやと猶なほ
氣きが廻まわりましてよけ腹はらが立たちますイエ／＼夫それでもげんざい眼めに
かゝり升しやうとごうがわいて／＼なりますことじや御座ござりませぬイ
ヤモ是これはとの達たちのきうと嗜たのしみごとて御座ござり升しやうソレモあなたさん
にはよふ御子おこ達たちがたんと出来でき来きます遊あそす(11才)じや御座ござりませ
ぬかナンノまあ是これは中なかがよひばかりて子こどもをたんと生うむと申まま
すものでも御座ござりませぬ。ほんの時の拍子おどしでござり升しやうホンニそ
れはそふと其御子そのおこさまはすくやかな。可愛かわいらしいよい御子おこさん
で御ざり升しやうナアそしてマア色白いろはくでうつきりとした御おかしこそう
なアノマア笑わら顔かほよしさんとしたことわいナアシテ御幾おいくさんにお
なりなきますへハイ師走しすま生なれで年としよわの五つ子ごこなります。き
つい損ぐんな子こで漸やう／＼半月はんげつはかりが一年いちねんになりまして年とし五ご(11才)は
よつほどちいそう御ざり升しやうナンノマア親御おやこ様のよくめで其やう
に思召おもほすので御座ござり升しやう。わたし眼めでは御五ごつさんではよつほど
大おほがらさんに存ぞん升しやうアノマア口演くげんことはいナアイエ／＼してまあ
御虫おむし氣けもなさそうにアノマア可愛かわいらしい御顔おほほわひナアシテマア
おとなしさんで宜よろしう御座ござり升しやう。イエ／＼もうはや／＼おうち
やくもので。どうもうもなりませぬ。ねつから言いふことは聞きま
せず困こまり入いてをり升しやうシテ近所きんじよは所ところがわるふござり升しやうゆへもの言い
が悪わるふてなりませぬなん(12才)申ましても聞きませぬイエモウ
おうちやくさんなが御丈夫じやうふさんでよろしうござり升しやうホンニそん
な御子おこさんの親御おやこ様さまは嘸じやうよひ御たのしみて御座ござりませふアノマ

アおつしやることいひわひナアもう／＼子供こどもにとんとこり
て／＼こりまいらせました。夫それでも追付おつけおあとがで遊あそばしま
すとお姉あねさんにおなりなとおのづからをとなしさんに御ごなりな
さり升しやうもので御座ござり升しやうアノマア其跡そのあとと口演くげんとびく／＼いたしま
すわいなあナンノまあおい／＼たりさんなりと出来遊できあそばすかよろ
し(12才)うござり升しやうわひなアまた今年ことし聞きが御ござります。御た
のしみになされませなど、女房にようぼう同士の口弁くひらながした挨拶あいさつでもつ
たもの也

○是これを先まづの女房にようぼうあぶらけなしに。実まじのためになるやうにいふ時
は。其御子そのおこも年としよわのしわす生うまれの五つとおつしやれども。年
よわふもせよ夫それでもよつほどちいそう見みへ升しやう。そしてマア女子
のくせに色の黒くろひにく／＼しい黒くろいうちにも底色そこいろかわるふて何
で(13才)もよつほど胎毒たいどくが深ふかふて虫むしか強つよふ見みへ升しやう。今の内うちに
医者いしやにかけて御養ごやしやう生ななさらずばついころりとした事ことが有あてから
跡あとが取とりかへしになりませぬシテよつほどのおうちやくものゝや
うに見みへ升しやうほとに殊ことに女郎ぢやうらうの御子おこをなりわひ。そだてになさる
と段々だん／＼と行義ぎやうぎがわるふなり盛人せいじんなさつてから親御おやこ達たちの手てにもあ
わぬやうになり、つゐに咎とがなし子孕ごはむものでござり升しやう。女郎ぢやうらうの子
の其やうに見みてむない子はこんと御かた(13才)づけなさる時
別に荷物ものぶが余慶よけ入いませふきつい御心ごこころつかひなもので御ざりませ
ふ。そしてマア近所きんじよの所ところかわるふて物ものいひがわるひとおつしや
るけれど。其御子そのおこの物ものいひがわるふて近所きんじよの子供衆こどもぐらうの物言ものいひが。
わるふなりそふなお子こで御ざり升しやうなんばちいさい御子おこでも女の

子の物いひのわるひのは聞にくひもので御さり升。随分厳しくしかつておうちやくを。なをして置なされませ。殊によつほど黒い御子なれば米かした白水に三日程つけてとつ(14才)くりとあらふて御上なされませねば。黒みがとれ升まひなど、挨拶するは真実たになることなれども母親これを聞ばどのやうに腹を立ふもしらず。さればどのやうにこづらにくひ。めんどい子でもアノマア可愛らしい笑顔よしさんな御子わひな杯としたあぶらでもながしてほめねばならぬもの也、愛の道理を能弁へて療治のしやうも此理にしかずと思ふべし

○葉のことを教へいると限なし。予か家の伝ありく(14ウ)かゝのごとくと演ければ。厚金敷安九拝して頓作先生を拝し。我誤てチンファンカンの医学を学んで誤らんとする所。大先生の御秘術によつて朝日の雲霧を払ふがごとく。初て医家の眼をひらき斜ならずして一枚敷の借家をかり表札を打、日々病人の来ることを待居たる折ふし。表に案内の声にうれしく思ひ。飛んで出れば十四五才の丁稚手をつかへ、私は甘口屋遅五郎から。教しへられまして参りまして(15才)

此体かとふ余人にも見せられふとふるひつ、医者のお病

南陽館 (15ウ・16才)

御座ります。柳馬場住のやからで御座り升。どうで御苦労さんながら御見舞なされて下されませといふを聞。柳馬場しなのやとは。どうやら聞たやうな名じやノフシテ御病人はどなたじやのハイおはんさんで御座り升といふフウ敷安は頓作先生の教の

所はこゝじやと思ひ折ふし貰ひ合せしぼた餅一つやりければ。丁稚大きによるこび扱御病人の御めしはどれほどくわしやるのと問へはハイ女子衆がいふてゝ御ざり升には。山盛にして(16ウ)三ばいづゝであがり升。扱々夫はよつほどよい食事じやのフウシテ裏むきはのへいつるべ縄のやうなが一尋半ばかりヤア夫はまあけしからぬことなれど食事相応のことなれば気づかひなことはなひが腹あんばいは何といふてじやハイ気づかひなことはなひが腹あんばいは何といふてじやハイあいまに痛むそうにござり升シテすきな物は何じやのハイすいものを好んでちよこゝいつしく。かくして梅干をあがつてゝ御ざり升フウソシテ外にはハイ頭痛がするといふてゝ御ざり升フウ扱もく貴様は(17才)よつほどかしこひ智慧のある子供衆じや。何もかもよう知つてゐるわひのといひ。たらしたり。ほめそやしてくり出しては問だんくゝと夫からそれへたづねるうちにホンニ全駄いつからのこと ज्याのハイせんど伊勢参りからのことも。うすく聞んでもないてはフウよしゝいしやい承知しました是から所へ参る所なれども。そこ元の方から先へ御見舞申ますと言て下されと仕をかへし(17ウ)初て娘の病人いふて来りしはこれ婦人に金のもふかるといふ瑞相と勝手づゝなる口合の吉祥を祝ひ、大に悦び兼て金比羅さま神道にては鎮宅靈符神。仏道にて妙見大菩薩近年の流行ものなれば何卒病人多くきたり薬違ひいたしてもよくきゝ給へ南無きんじやうさいはいくゝといのりしきどく有しやと思ひまた彼秘術を行ふへしとて薬箱片手

に引さげいさみ進んでしなのや(18才)さしてぞ急ぎけるかく
て敷安はしなのやにきたり。先刻御使に預りました。厚金敷で
こざり升といへば。ふしぎそうにイヤ。此方から御頼には上
ませぬ。名は何と御聞なされました。此方は帯屋でござり升が
コレハ。信のやで御ざり升ソレハ隣で御ざり升へイあまり気
急で取違へました大に不調法といひこそ。と出てしなのやの
内に入敷安でござりますと通しければ。これへ御通りなされま
せとの案内に(18才)つれて罷通れば主立出コレハ。御苦勞
千萬まづ病人は此方の娘おはんでござります。御覽なされて下
さりませとありければ。敷安おはんか前へかくより腹脈の見
やう。薬の配剤は知らねとも。脈をとり小首をかたふけ思案の
体をなしタ、フウくといひ、口の内にて独り言をばい。い
ひ。兼て秘術の手の出しあはんは脈体を見てとり。使の丁稚に
得与聞置ことなれば。すました顔して。定て御食事はよつ(19
才)程よふあかりませふがなソシテ御うらむきのおつじはか
たいのがたつふりと通しますはづじやシテ少々合点のまいらぬ
こともござり升。へイ夫はなんでござり升其儀はまづあとで申
ませふ。少し旅草臥も見へますし。腹も少々痛脈体也。またづ
つうのきみもありそなる容体なり。外には別の子細はござり
ますまいなと。聞て母親びつくりし。なる程さやうて御ざり
升。何もかも。口演とをりて少しもちがひはござり(19才)ま
せぬか。誠に燈台元くらしとはよふいふたものでござり升。扱
打あかして申さねば医者の本意が済ませぬ。実は御娘子は御妊

身でござり升と聞て母親びつくりし。娘おはんは胸に覺の顔う
ちあかめヲ、イヤなんのまあそんなことがござりませふとはづ
かしそふなやうすぶり。敷安まゆにしわをよせ。夫にはちがひ
ござりませぬと。おしつけて慥にいふ。先脈体は右の趣なれど
も。先々おなかを見て上げませふといへば(20才)おはんもまた
おなかを見られてどのやうなこといわりやうもしれんとは思へ
ども是非なくふところを少しくつろげければ。敷安胸より腹の
あんばいを見て雪よりも白く肌ざはりは実に綸子か。羽二重の
ごとくきめの細きことは。玉子の煮抜が。運上とりそふなむつ
ちりもの。敷安これを見て大に驚き氣をとりのぼせ手を震わせ
けるが。爰が一大事誠にしんほう所じやと齒を喰しばかりて胸
をしづめハツア思ひ(20才)ませぬ。扱もくあなた様にはほ
うから容体を申さぬ先にみなおつしやり升と。感心の体を見
て。してやつたりと敷安頭にかつてハテそりやどふで外の医者
とは違ひ升。母親近くより。只今いと合点のいかぬとおつしや
るは何で御ざり升氣がゝりにござり升、との案じ顔。敷安子細
らしくマア旅草臥か少々見へ升と申ますは此比伊勢参りか大和
廻りでもなされませなんだかな。母親ハイ娘のことゆへ嫁入し
て(21才)からは参らしにくふござり升ゆへ。只今の内かよひ
と存まして御隣の長右衛門さんが慥な御方でござり升ゆへ御頼
申てつれて参つて貰ひました。サアなんでも石部か草津あたり
からの病氣のそもと見へ升。へイその石部か草津からとは何の
ことで御ざり升。ハテサテ御合点のわるひアノ長右衛門殿は。

あかいとやらくろいとやらとかく娘の子を病人にするくせが有
といふ評判をせんその風呂呂やて聞ましたが御隣でも御存御ざり
(21ウ) いたせしこともあり誠にしへ聖人の捉も色と酒とは
敵と知るへしと宣ひし、又ならぬ堪忍するかんにんともいふ
手嶋の教もありと心に心を静むれどもいよく震ひ止さりけれ
ば実誠秩父の重忠も景清程の勇士なれとも色は思案の外なりと
了簡つけられたともあり又吉田兼好法師も色好ざる男は玉の
盃底のなきがごとしと古人の詞、何か苦しかるべきと思ひ切
たる形勢にむすめ(22オ)

授かつた葉は外によもあたし手代が匂はすかゞの菊酒

金英 22ウ・23オ

おはんは大きに驚きヲ、イヤといひければ敷安心どきく、いか
かではせんと思ひしが心をふたゝび取置しホンニそれく誠哉
加賀の千代女か匂に。思ふ人にいやと女のつみふかしとよみし
こともありされば。女のいやはやはり得心したる枕ことばと
思ひ又々再び思ひ切たる其振舞今度はおはんも大きにびつくり
仰天し大声あげてヲ、いやくくゝとむつくと起てあきれ果て
逃て入足音敷安が耳には雷の落たるごとく(23ウ) 面目を灰に
まぶし。きせる田葉こ入も打忘れ。ろくくゝに暇夜をもせずし
て足を宙にして己が家まで逃帰り情思ひけるは。古人の金言
をも忘れ加賀の千代女のいひしこともとんとあてにならずと。
偏に千代を恨みけるが発句を美として外聞を灰にまふせしこと
も。これみな千代がうそのかわより出たりと己が臭みを棚にを

きひとへに千代女を恨ける○(24オ)

○厚釜敷安ひとへに千代女を恨みし心徴しけん、千代女夢中に
顯れ出。敷安に示して曰、汝氣転頓作者に医道奥儀の伝を受た
りとも未だ婦人の療治のしやう。女の情をもしらざるかゆへ
か、る恥をかきたるべし、よつて婦人の療治秘密の妙薬あるが
ゆへ汝に伝ふべきの間、此法書奥にした、め置ものなれば此法
を用ひて療治する時は婦人一切の諸病治せずといふことなし
(24ウ)

婦人秘密の妙薬

一第一土気はなれぬ女には。みやうばんをせんじて用ひ置、其
後おくるもちの黒焼を用ゆべし、土気を大便にくだす事妙也
一背の凹女には江戸の生鰻のはしりに京の初茄子と胡瓜とを大
坂の川水にてせんじ用ゆ忽ち背高ふなる事妙也、又法火の見
やぐらをけづり用いてもよし(25オ)

一背高過てる女には。大黒の尿をえびすの御茶湯にてねり丸薬
にして用ゆべし

一男を見てつきくしく。百性めきたる女にてかたいぢいふに
は瓢箪と鯰魚とを生ふて用ゆ立所にぬらくら者となる事妙也
一色気もなき女には七夕誕生のおしどりの血と風呂屋の後家の
爪を合せ用ゆへし

一色黒き女には晒屋のうすと杓とをよく(25ウ) せんし、日毎
に入ては日にさうし晒ては入湯する時は雪のごとく白ふなる
事妙也

一ムの凹を高ふするには。天狗の面に麻黄を加味して用ゆべし、又象を用ゆればム長すぎて見ぐるし、心得違すべからず

文政四年巳正月

京都書肆

河南喜兵衛 美濃屋半兵衛

一尻の大きなを小さくするには福介の人形に柳の木を黒焼にして用ゆへし

大阪書肆

河内屋茂兵衛 (28才)

一肥たる女を瘦じ、にしてしなやかにするには干 (26才) がまずと幽霊の影干を合酢にて用ゆへし

「よしまる かつや 本学教員」

一瘦たる女をむつくりと肥さすには。つきたての餅に伏見人形のおたふくを入、雑煮にしても夜毎用ゆへし

一口の大きなを小さく見するには手づまの徳利を黒やきにして用ゆへし

一ひんしやんとすけなき女には。庚申前の赤犬のよたれを用ゆへし (26ウ)

一日南くさき女には坊風を蛸の洗汁にてせんし其湯にてあらふべし

一慎みふかき女には蟬の笛を生にてのますべし、立所にて泣くと妙也、又あひるを加味すれば忽ち尻をふり泣事奇妙也

一からくしたる女は薯蕷汁と雨乞の松明をつはにてねり用ゆへし

一ものがたき女には蜂の尻に百足を加味して (27才) 用ゆべし一寸さわいてもついおいでる事妙也、其余妙薬奇方あまたにして中々筆紙に尽しかたければ猶春はがにめもして入

日くめてたしく

当世医者風流解下ノ巻 (27ウ)